

「遠音」の曲に寄せる一四の詩

原子
修

うつくしい消滅

― “遠音” の曲「アンヌプリ」に―

ニセイ・コアン・ヌプリ

光のしずくをふりこぼして

だれの空を舞う

くだけ散る翡翠の時間

すすり泣く風の鈴

ついに

黒曜石のいのちに到りつけなかったものの
かなしみの視線が

天球の中心へと旅たつ日

大地は

乳房のようにもりあがって

原初の火を語りはじめるだろうか

森は

みどりの髪のようにはためいて

わたしのはじまりをいいあててるだろうか

ニセイ・コアン・ヌプリ

無限を

アジュール
紺碧のふかみに沈めていくひとよ

問いつめるほど

ハイマツの茂みは苦しみもだえ

にじりよるほど

クマザサの唇はうめいて

舞台状熔岩のいただきに

いつ

太陽の蝶は舞いおりる

シリペツの瀬々らぎをすすって

水晶のように冷えるくるぶし

北西季節風の花びらを摘む

雪のように白い指

ニセイ・コアン・ヌプリ

虚空の底へと

おのれの重量をすてつづける

鳥

わたしの影を背負いこんだまま
とおのいていく

雲の背中

宇宙への

うつくしい消滅

雪

―「遠音」の曲『雪』に―

天をなしくずして

どんな小銭の光がふりしきる

まっしろい片道切符が

とつてもいっぱいふぶいてくるよ

行っただけになってしまったものだけが

そっと送るかえしてくれる

書置の花びら

なぜ 唇に

みずしらずの門が昏れるの

どうして

遠景にしずむ白鳥だけがうつくしく償うの

よびもどしたい一心にすける指の先から

はらはらと千切れ

いつか ぜんしん

おびただしい蝶の死にふぶいていってしまいそう

母

―「遠音」の曲『大地』に―

地平線の腰ひもが

すみれいろにほどけて

みすてられた金いろの産道から

まい朝

みしらぬぼくはうみおとされる

季節の胸もとからはけられそうな

光の乳房

したたる丘陵

甘える森

密約された母がうねっていくよ

はずかしい野の腕が

ぼくの日を空のように抱きしめ

蜜蜂の川は

北半球のへそからながれでる

春の乳首

—『遠音』の曲「カッコーの森」に—

春の乳首が

ハルニレの梢からにがしてやった

アマランス・パープルの曙

北半球が

とおく立ち去って

すぎとおった光の針は

だれのありかをつきとめようと

やまずゆれる

シラカンバの花は

大地へと

純金の時刻をふりこぼし

ナナカマドの花びらは

ほろびさった冬への鎮魂を

甘く焚きしめ

よろこびの鳥よ

いつ

北回帰線の苦しみをとびこえる

いつ

熱帯前線の糸をわたしの指にゆわえつける

とけさった雪のかなしみを

まっしろい花房にかなでるライラック

緑のむせび泣きへと手のひらをひらく
ポプラの葉

太陽は

夏至のいただきへとはばたきのぼり

サバンナの風は

北緯線のギターをかき鳴らし

カッコーよ

いつ

わたしの春を

円環の空にむすんでくれる

いつ

わたしの愁いの壺に

赤道の蜜をしたたらせてくれる

いつ

さいごの氷をとかしたばかりの
わたしの内部で

うまれたての地球を回してくれる

ハルニレの木

—『遠音』の曲「はるにれの木」に—

だれの

ますます遠のいていく帰りを待ちわびて
ねむりのない夜を立ちつくしたのか

沖積土平原をうみおとしていった曙で
いくにんの

光のみどりごははマリとなった

内部の空いっぱいにはりつめた
くるしみの虹

ふりしきる緑の血

おびただしい葉のすすり泣きは
風のもの？

それとも

木じしんのもの？

朝焼けのかまどをかけぬけ

凍てつく雪のアーチをかいぐり

春への何グラムの確信によってのみ

わたしは

微量なゆるしを花咲いた？

風

—「遠音」の曲「風」に—

どこから？

とおくの指が

地平線を

ひとすじの光につまびいて

わたしのへりから

すきとおった存在はかぎりなくふきこぼれ

どこに？

ほろびの花びらへと

とめどなくうらがえされていく

時間

いくえにも重なりあった過去の中心へと

しずみ切ろうとする

空

どこへ？

わたしから

しきりに泳ぎさっていく

だれかとの境いめ

ゆくえ不明の夜明けは

いつ

方位のない出会いへと過ぎていく

だれに呼ばれているのだろう

—「遠音」の曲『THE MUSIC OF EARTH』に—

きょうのわたしは

だれに呼ばれているのだろう

馬鈴薯の花は

だれのつらさを甘く焚きしめるのだろう

馬たちは

ほんとうにしているのだろうか

空のふかき

おのれのゆくすえ

草のいつくしみ

銀河は

だれの目の水底^{ミナソコ}にすすりとられ

一本のハルニレの木は

おのれを支える大地のはるけさに

いつ気づいてざわめくのだろう

はまなす

—「遠音」の曲『はまなす』に—

夕陽よ さようなら

わたしだけは

この浜辺に

いつまでも残って

あなたの思い出を

血のいろに咲きましょう

血のいろにみのりましょう

そして

砂地に散り

あらたないのちをはぐくみましょう

光のまなざし

—「遠音」の曲「陽光」に—

だれの目から

光のまなざしは流れでて

わたしを

まばゆくつつんでくれるのだろう

みどりのうべないは

だれの髪のひとつじひとつじから

こぼれおちてくるのだろう

かたりつくせない言葉

汲みつくせないほほえみ

とめどなく空のふかみからわいてくる想い

だれのすぎとおった指が

そっと

わたしのこころの糸をつまびき

なにびとのいとおしいそぶりが

わたしを

きらめく海につれさっていくのだろう

雲

—「遠音」の曲『十勝野』に—

ひろい ひろい

どこまでいったって出口がない

ほら

大昔の象たちが

地平線のあたりで

ゆったり

無限の面積をたべている

とおい おおい

いつまでたっても幕がおりない

だれだ

すぎとおった時間のふろしきに

ビートや牛や風景のありったけを

ふわっとつつみ

はるか

草いろにうづく空のはてへ

ゆうゆう

はこんでいくやつは

石狩川

― 遠音の曲「石狩川」に―

時は 流れ

水は 流れ

千の 苦悩

万の 悔恨

億の 言葉は

流れ去っても

石狩の川は あり

石狩の野は あり

北に生きる者の

キラリと輝く意志はある

鴉^{ヒワ}いろの口笛

—『遠音』の曲「TOYOHIRA(とよひら)」に—

あのとぎの垣根は

いまも

この指にとまってねと

赤とんぼに声をかけているのだろうか

道に迷って

ゆくえしれずになってしまった

幼い頃のわたしの手を

きょうの夕焼けは

どこにひいていつてくれるのだろうか

サクランボの木にのぼったまま

降りられなくなった少年に

いつか

人生の縄ばしごはみつかるところか

時間の浅瀬ですなどったヤツメウナギ

飛び去ったままかえらないサクラドリ

すぎさった日々の唇が

いまでも吹きつづける

鶺鴒ヒヨドリいろの口笛

かくれ鬼遊びの電柱のかげで

やっとみつけたじぶんは

いつのまにか

大人のこわい面をつけていて

むかしの草むらで摘みとったタンポポは

やがてくる空に

どんな純金の風をつぐなうのだろうか

ヤシャインよ

―『遠音』の曲「地球岬」に―

ヤシャインよ

チケプの絶壁のへりに

風の針となって

いつから立っている

エン・ルム岬は

海に

とんがり頭をしずめ

新第三紀の安山岩は

もう

地球の内部の火を語りつくしたが

北緯圏を冷蔵する集塊岩は

とつくに

わたしの切ない記憶を封印したが

波は

トツカリシヨ岬に

液体のアザラシとなつてうちよせ

潮騒は

チャラツナイ浜に

琴のしずくをちらばし

ヤシャインよ

チケプの断崖のはずれに

水晶の脳ずいを光らして

なにを思い悩む

無限は

むすうの水の糸束となつて

イタンキ浜のお椀にあふれ

鳥は

オ・イナウ・ウシの海岸に

木幣の森をこぼし

水平線は

いつまでも帰ってこない木霊コダマのように

遠方をはりつめたままだが

マスイ・チセの浜に

古代の海猫は

どんな家を置き忘れていった

ポク・オ・イの海は

失われた時間を

どんな北寄貝ホツキガイの皿に汲みとった

ヤシャインよ

空から垂れてくる

モ・ル・ランのゆるやかな下り坂を

指にからみつけたまま

いつまで

チケプの切り立った岩の上で

だれのものでもない死を

生きつづける

永劫の光をはなつ灯台となって

文明の霧に吠えかかる霧笛となって

精神のフンベよ

不死の鯨よ

ヤシャイン

立ちつくしたまま

永遠を旅する男

宝石のシャワー

—『遠音』の曲「星ふる里」に—

まぶたのかげにしずんでいった世界中の目を

夜空は

どんなダイヤモンドの光にかえしてあげられよう

暗黒をむかえてはじめてめざめる

もう一人のわたしの冠に

スピカの真珠はいつ舞いもどる

鳥たちの

うしなわれた生いたちのありかを明かす

銀河

めしいのさいはてを

闇は

ドルフィンの光年へと問いつめ

鶯のくちばしがとりおとすルビーは
琴の小指からしたたるエメラルドは
小狐の耳がふりこぼすアメジストは

いつ

宝石のシャワーを

わたしの

内部の野にときはなつ

(札幌大学教養部教授)